慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済価値論（三）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.1 (1919. 1) ,p.113- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190101-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜錄

經濟價値論(三)

野村兼太郎

五

次に主觀的價値論に就て先覺の述ぶる所を見てみやう。現今に於て最も廣く一般に稱へられて居るのは前述の如く主觀的價値論である。殊にかの限界效用說の稱へられるや一層その主觀的色彩を强くした。限界效用と云ふも何も事新しいことではなく、單に快樂は是を繰返すに從つて次第に其の强度を減ずると云ふ心理的經驗に基たものである。これを初めて唱道したのは獨の H. Gossen であつて(一八五四年)、つゞいて是よりは遲れたが全く Gossen の說を知らずして別に此の說を發見したのは英の S. Jevons である(一八七一年)。更に墺の C. Menger も同年その "Grundsätze." に於て、及び瑞の L. Walrus は一八七四年に "Elément d'économie politique pure." に於て、各々多少の相異はあるけれども略々同樣の學說を發見した。①

今是等主觀派價値論者中先づ Jevons に從つてその立脚する處を見るに、

"Repeated reflection and inquiry have led me to the somewhat novel opinion, that value depends entirely upon utility."②

而してその效用 utility を定義して、

".....the abstract quality whereby an object serves our purposes, and becomes entitled to rank as a commodity."③

人間に役立つとは如何なる意味を云ふかと云ふに、極めて心理的の解釋を下し人間に快樂を

與へ苦痛を除くことであるとなし、更に斯如き意義を有する效用と物との關係に就て述べて曰く、

"……, utility, though a quality of things, is no inherent quality. It is better described as a circumstance of things arising out of their relation to man's requirements."[3]

斯く效用が物に固著の性質にあらずとする必然の結果として、效用は單に其の物の狀態に依つて變ずるのみでなく、人間との要求關係から生じて來る物の狀態であるから、若し人間の欲望滿足に制限があるとするならば、其の價値はその數量に依つても變化しなければならない。例へば Jevons 自身の例に從へば地中に埋れたる鑛石、人目に觸れざる「ダイヤモンド」、刈られざる小麥等に效用がないと同時に、一日一 quart の水は人の渴死を救ふ高い效用があるが一日數 gallons の水は料理洗濯等の低い效用を持つやうになる如く、水の分量に從つて其の效用を異にする。

斯如く論じ來れる彼は更に價値に就ては先づ其の語の曖昧多義なることを指摘し、普通用ひられる價値の意味を三種に分析し、これと效用との關係を表示して居る。即ち、

(1) Value in use = total utility;

(2) Esteem = final degree of utility;

(3) Purchasing power = ratio of exchange,[5]

而して彼は價値を以て第三のもの即ち交換比率 ratio of exchange に限つて居る。然らばその交換比率と云ふのは如何なるものかと云ふに、先づ Jevons の引例に從へば、鐵一噸の價値は金一 ounce であると云ふのも、金一 ounce の價値が鐵一噸であると云ふのも共に誤謬であつて、鐵一噸の價値は金一 ounce の價値に均しいと云へば稍々正當である。即ち

"The notion of value is concerned only in the fact or circumstance of one exchanging for the other."[6]

以上は Jevons の云ふ限界效用に依る價値論である。其の價値の定義に關して必ずしもすべての點に於て贊同することは出來ないが、こゝでは價値論そのものより寧ろ限界效用說に多大の興味を有するのである。故に次に更に Jevons より明確に限界效用說を稱へたる C. Menger の價値論を覗ひたい。

Menger は價値の概念を定義して、

"Die Bedeutung, welche konkrete Güter oder Güterquantitäten für uns dadurch erlangen, dass wir in der Befriedigung unserer Bedürfnisse von der Verfügung über dieselben abhängig zu sein uns bewusst sind."[7]

であるとした。für uns に Bedeutung であるとした彼は Jevons と同じく欲望にその出發點を求めて居る。彼が欲望滿足の程度に從つて "Güter der ersten Ordnung", "Güter der zweiten Ordnung" 等と財を分類し、直接欲望を滿足させる財を第一に置き、是が生產の用に供せられる財を第二、更に第二の生產に供せらるゝものを第三、かく以下順次に配例したるは興味多き分類である。

併し乍ら吾人が彼を呼んで限界效用說の主張者であるとし、殊にこゝに引用しやうと思ふのは彼が價値の發生論をなし五つの條件を擧げたその第五のものである。

"Der Wert eines konkreten Gutes order einer bestimmten Teilquantität der einem wirtschaftenden Subjekte verfügbaren Gesamtquantität eines Guts ist für dasselbe demnach gleich der Bedeu-

tung, welche die wenigst wichtigen von den durch die verfügbare Gesamtquantität noch gesicherten und mit einer solchen Teilquantität herbeizuführenden Bedürfnis-befriedigungen für das obige Subjekt haben."[8]

これ所謂限界效用に依る價値決定の理法に外ならなし。Otto Conrad が其の著 "Die Lehre vom Subjektiven Wert." に引用せる Böhm-Bawerk の言葉は一層明白に吾人に說明を與へる。

即ちある貨物の種類が自由になし得ればなし得る程一層その貨物に依る欲望は滿足させられ欲望滿足の最後に位する處のもの、即ちその貨物の一つを取除くと先づ第一に問題となる欲望が益々重要な欲望でなくなる。依つて彼は

"Sind vollends von einer Gütergattung so viele Exemplare vorhanden dass nach vollständiger Befriedigung aller darauf angewiesenen Bedürfnisse noch weitere Güterstücke erübrigen, für die es gar keine nützliche Verwendung mehr gibt, dann ist der Grenznutzen gleich Null, und ein Exemplar der betreffenden Gütergattung wird wertlos."[9]

更に彼は極めて僅かな效用より持たぬ眞珠やダイヤモンドが高い價値ありとし、多くの效用を有するパンや鐵がそれよりも低き價値を有し更に廣き效用を有する水や空氣が全く價値なしとする奇異なる現象を說明して曰く、

"Perlen und Diamanten sind eben in so geringer Menge vorhanden, dass das Bedürfnis nach ihnen nur zum geringen Teile gesättigt ist, und der Grenznutzen, bis zu welchen die Befriedgung reicht, relativ hoch steht, während glücklicherweise Brot und Eisen, Wasser und Luft in der Regel in so grossen Mengen verfügbar sind, dass die Befriedigung aller wichtigeren, auf sie angewiesenen Bedürfnisse sichergestellt ist, und von der Verfügung über ein einzelnes Stück order eine konkrete Teilquantität entweder sehr geringfügige, order gar keine konkreten Bedürfnisse mehr abhänging sind."[10]

以上述るが如く限界效用說は極めて心理的事實に基くものであるから Jevons の如く

".....the theory persumes to investigate the condition of a mind, and bases upon this investigation the whole of Economics,...."[11]

と欲する者、若しくは Menger の如く

"das Ziel aller Wirtschaft ist nicht die physische Vermehrung der Güter, sondern die möglichst vollständige Befriedigung der menschlichen Bedürfnisse."[12]

となさんとする者にとつては當然の論理的歸趨であるかも知れないが、經濟學を斯く特殊の欲望研究と云ふが如き心理的的地位より脫却して一の獨立の科學たらしめんと欲する者にとつては飽き足らざるを得ない。併し乍ら限界效用說が心理學的なりと云ふ理由に依つて一概に是を排斥することの出來ない所以は其の間に尙ほ一面の眞理があるからである。勿論限界效用說は價値說として完全なものであると云へないことはすでに W. Lexis の指摘せる點に依つても明かである。即ち欲望は一度滿足されたら再び起らないものではなく、日に月に新である。從つて若し其の貨物が貯藏することが出來たら、單純に限界效用說を適用することは出來ない。更に其の貨物に代用品があるとするならば、その貨物に對する日々の欲望を考へる時には、

".....die Seltenheit desselben aber wird nicht mehr nach dem subjektiven Mangelgefühl beme-

ssen, sondern nach der objektiven Schwierigkeit der Beschaffung der in Aussicht genommen Menge, d. h. nach dem für diesen Zweck erforderlichen Aufwand."[11]

即ち一時に是を以つて欲望を滿足させやうとするから、こゝに欲望の限界が生ずる。實際に於ては寧ろ之と反對に人間の欲望の無限性と是を滿足させる手段の制限あることゝが、こゝに出來る限り欲望を滿足させやうとする努力が始るのである。併し乍ら斯如く人間は單に欲望滿足の衝動のみに依つて努力し生きてゆくものではない。更に高き理想を有して居ることは前述の如くであるが、今は問題外であるから暫く是を置く。たとへ限界效用說が多少理論上不精確な點があるとしても、尙ほ從來述べ來れる點に於て一の眞理のあることは拒み得ない。唯々欲望を滿足させることの困難と云ふは餘りに心理的の解釋である。實際に於ては Lexis も云へる如く費用 Aufwande 若しくは辛勞 Mühewaltung を以つて到達することが出來ること[12]　換言すれば勞働に依つて始めて到達し得ると云ふことゝ、貨物そのものに效用性があるためであるまいか。地中の鑛物が經濟上價値がないと云ふのは Jevons の云へるが如く「鑛物そのものに效用性がないためであらうか。

斯くてこゝに主觀的價値論に於てあるものを價値ありと斷定するには二つの必要なる條件がある。即ち「は效用性 Nützlichkeit にして他の一つは稀少性 Seltenheit である。欲望を滿足させると云ふ心理的命題の根本たる此の二つの條件は果してそれ程心理的のものであらうか。余は先づ後者に就て述べて見たい。

前述の如く稀少と云ふもそれは絕對でない場合がある。唯吾人が是の存在を知らなかつた場合、若しくは知つて居ても是を吾人の用に供し得ない場合の如きがそれである。すでに前節に於て述べた如く勞働は價値を創造する。これを云ひ換へて見れば勞働に依つてそのものゝ稀少性を少くする。即ち以前よりも所謂存在高を增加する。例へば種々なる困苦勞働の結果、ある金山を發見し金を採掘したと假定するならば、今迄全く價値のなかつた山に價値が生ずる。こゝに一つの矛盾がある。勞働は一方價値を生せしめると共に、他方に於て價値を下落させる。金山を發見した結果、金の價値は金全體に於て增加するが個々に就ては下落する。Jevons の言葉を借りて云へば total utility は增加するが、final degree of utility は下落する。併し乍ら余は更に一歩を進めて考へて見たい。吾人が勞働してゆくのは明かに價値の增加を目的として居ると共に、同時に價値自身の消滅を目的として居るのである。勞働の目的たる經濟價値が絕對價値ではなくして相對價値である限りこの事は眞理である。恰も學校敎育が敎育を普及するのが目的であるに拘らず、事實上敎育の消滅を希望すると同樣である。若しすべての人間が小學卒業以上の學力を有するやうになつたと假定すれば、小學敎育自身は消滅してしまはなければならない。甚だ空想的假定ではあるが是を許すならば、理想的世界と云ふのはすべてのものが恰も現在に於ける空氣の如く自由に攝取し得る世界。即ち經濟價値の消滅した時を云ふのであらう。これは稍々理想に馳せ過ぎた傾きがあるけれども、少くとも吾人は是に向はんとして努力し、一歩たりとも此の方向に進むべきではあるまいか。而して始めてこゝに經濟學と倫理學とが相背反せざる一致點を見出し得るのである然らば斯如き世界に於ては經濟的なる價値はな

くなるのであらうか。否絶對的なる經濟的價値は常に存在する。絶對價値及び相對價値の相違如何は後に讓り今は暫く置く。こゝに於て問題は第二の效用性に移る。

Jevons の云ふが如く效用は物に固著して居ないものであらうか。地中の鑛石、人に知られざる「ダイヤモンド」等は一見效用がないやうである。併し乍ら是を採掘すれば效用が生じ價値がある。採掘と云ふ勞働を加へて價値が生じたのではあるが、すでに前節に述べたるが如く斯如き勞働をなすに至つたのはそのものに價値ありと認めたからである。そのものゝ價値ありと認めたのはそのものに效用性があるからである。若し地中の鑛石にして採掘するも何等效用のないものであるとしたら、吾人は是に對して一顧をも拂はないだらう。よし勞働を加へたとしても價値は生じないだらう。こゝに於てあらゆるものを理論上次の四種に分けることが出來る。

（一）效用性あつて少數なるもの、
（二）效用性あつて多數あるもの、
（三）效用性なくて少數なるもの、
（四）效用性なくて多數あるもの、

以上四つのものゝ内（三）と（四）は全然問題にならない。然し唯從來效用なしと考へられて居たものが、發明發見等のため效用が生ずることがある。此の場合效用が急に發生したのではなくて、又 Jevons の云ふが如く物と人間の要求との關係から生ずる物の狀態 circumstances ではなくて、人間の要求が物にある效用性を認識したのではあるまいか。故にすべての物が完全にその效用性を發揮した世界こそ理想の世界である。恰も吾人がその持てる天賦の才能を充分に發揮の出來ることが眞の理想であると同樣である。

此の四つの内經濟學上問題となるのは第一のものゝみであるが。第二のものは經濟上問題とはならないが、實際に於ては效用があつて一度それが限りあるものとなるや直ちに經濟學の對象に這入つて來る。而して理想としては吾人は常に第一のものをすべて第二のものになさんとするのである。これに依つて見るも稀少性は寧ろ附隨的の條件であつて、效用性こそ價値の本來の條件でなければならない。

以上限界效用說を推論して來た結果、こゝに價値の依つて存する效用なるものは單なる人間主觀の所產でなく、人間主觀の對象となる物それ自身の有する效用性の認識であると云ふ點に到達した。併し乍ら勿論人間を離れて效用性があるのではない。恰も認識論に於ける模寫說 Abbildungstheorie の如く純然たる心理的に考ふべきでない。あるものが效用ありと認めるのは人間である。故に人間を離れて效用性は存在しないが併し乍ら效用性がないものに勝手氣儘に效用ありと考へることは出來ない。これは即認識論の問題に外ならない。認識論に於て主觀對客觀の問題の解決方法は取りも直さず經濟學に於ける價値問題の鍵ではあるまいか。而して經濟學は此の點に於ても哲學的根據を必要とする。

經濟學が科學として存立してゆく上に於て、其の根本に哲學のあるとないとは、單にその概念的發達をのみ考へるのなら、何等の關係はないだらう。恰も人間が單に生きてゆくと云ふ丈けなら敎育がなくとも立派に生活してゆけるやうなものである。併し乍ら人間として根據づけられるのには敎育が必要であるが如くに、經濟學が科學として根據づけられるのには哲學を必要とする。哲學に依つて證明せらるゝことに依つて始めて科學としての經濟學が樹立すること

が出來る。

然らば經濟學が科學として獨立の地位を占むるには如何なることが必要であるか。苟も一の科學として獨立する以上には必ず人類一般の文化と何等かの交渉が無ければならない。こゝに云ふ文化とは單なる現在の文明進歩を指して云ふのではない。それよりもつと永遠の價値のある Idee を意味するのである。併し乍らこれは今此の處の問題外であるから極めて簡單に止めて置く。即ち人間活動の意義の本源でもあり多種多樣なる社會の統一體でもある眞の實在たる價値そのものゝ世界である。而して科學たるからには常にその内容に一の統一を必要としその統一者であり且つ眞の文化に關與する一の先天的要素を必要とする。此の點に於て余は左右田博士の說に贊同する。

「此の純理經濟學上の心理主義〳〵くる爲めには、其の概念構成に於て一を以て經濟學に對して本質的なりとして之を採り、他を然らずとして之れを棄つる所以の根本原理たる嚮導觀念（die leitende Idee）を研覈するを要す。……カント哲學上に解せられたる意義に於て之を換言すれば、此の如き觀念は概念構成に對して先天的ならざるべからず……一經驗科學の範圍内に於て其の概念全部の構成に當り、一を其の概念に本質的なりとし、他を非本質的なりとするには其の學全體を貫通して其の概念構成の歸趣を示す一嚮導觀念あることを要するとの意に於て、其の學の概念構成に先天的要素を要すと云ふのである。」(13)

然らば經濟學に於ける斯如き嚮導觀念とは如何なるものか。余は是を先天的なる經濟的價値の認識にありと思惟する。余は先づ經濟價値と經濟的價値との關係及び相違を明白にして言語より生ずる誤解を避け、幷びに效用性と是を認識する主體との關係を明かにしたいと思ふ。

註一、本稿を草するまでに Gossen, Menger, Wiether 等の原著を手にすることを得ず、止むなく Jevons の "Theory of Political Economy." Conrad の "Die Lehre von Subjektiven Wert." Smart の "the theory of value." 及び Kaulla の前掲價値論史等に依つて以下論じてゆく

註二、Jevons:—"Theory of Political Economy." 4th ed. p. 1.

註三、同上　p. 38.

註四、同上　p. 43.

註五、同上　p. 81.

註六、同上　pp. 77-8.

註七、C. Menger:—"Grundsätze der Volkswirtschaftslehre." S. 78.（Kaulla 前掲價値論史、二四八頁より二五一頁に至る間より引用以下同じ）

註八、同上　S. 107 f.

註九、Otto Conrad:—"Die Lehre von Subjektiven Wert." S. 54.

註一〇、前掲 Jevons:—pp. 14-5.

註一一、前掲 Menger:—S. 171.

註一二、W. Lexis:—Allgemeine Vorkswirtschaftslehre." S. 31.

註一三、左右田博士「カント認識論と純理經濟學」（經濟哲學の諸問題六二—三頁）

年金の種類

池田龍藏

（未完）

本邦に於て年金なる語は英語の Annuity 獨語の Annuität 佛語の Annuité の翻譯にして、原語は共に羅典語の annum なる文字より變化し來りたる語なり、元來年金なる語は頗る多岐に亘りて用ひられ殆んど一定の解釋を下す事能はず去り乍ら大體廣義に於て年金と云ふ時は或る一定の金額を或る一定期間毎に拂戻す事を意味し年金公債、年金保險、恩給年金、賞勵年金、確定年金、年賦償還金等を包含す、思ふに年金な